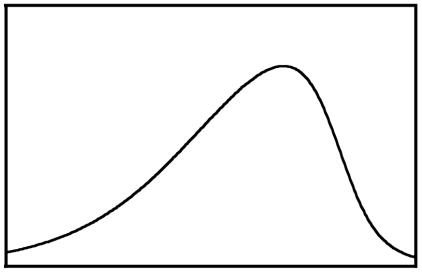
成長と崩壊の文明論 ～セネカ効果を中心に～

大谷正幸（金沢美術工芸大学）

「理性的な論議ができて、しかも実効が望めるのは、ある与えられた状況の情動性が一定の臨界値を越えない場合にかぎる。ところが情動の熱度がこの線を越えると、理性の効用はなくなり、理性に代わってスローガンや奇怪な願望妄想が幅をきかせるようになる」（C.G.ユング『現在と未来』）

資本主義の行き詰まりを論じていた水野和夫氏の著作は縮小社会研究会でもしばしば紹介されていましたが、2017 年の著書 『閉じてゆく帝国と逆説の 21 世紀経済』（集英社新書）にはいよいよ「エネルギー収支比を考える必要がある」、「原油は値段の問題ではなく、採掘が持続可能かどうかの問題に転化することになる」として、フィレンツェ大学のウーゴ・バルディ教授の EU 会議における発表資料（2014 年のもの）が紹介されています。そのバルディ教授はローマ・クラブの正会員でもあり、2017 年に”The Seneca Effect: Why Growth is Slow but Collapse is Rapid”(Springer)と題するローマ・クラブ・レポートを発表・出版しています。『成長の限界』で未来社会に警鐘を鳴らしてから 45 年後のレポートは崩壊に焦点を置いた内容なのです。

「セネカ効果」とは、「成長過程が緩慢であるのに比して崩壊過程は急峻であること」を表す造語であり、ヒューマン・エコロジーに関心を持つ欧米の人々には徐々に浸透しているように思われます。セネカ効果という用語は、ローマ帝国時代の政治家、哲学者、劇作家で、第五代皇帝ネロに仕えながらも自害を言い渡されたセネカが、友人に宛てた手紙に「もしもあらゆるものが出来上がるのと同じくらいゆっくりと滅びるのであれば、それは私たちの弱さと私たちの住む世界にとって何らかの慰めとなったことだろう。だが、現実には成長の速度は遅く、破滅に至る時はすみやかだ」（ルーキーリウスへの手紙、n. 91、大柴芳弘訳『セネカ哲学全集 6』岩波書店） と記していたことに由来します。



セネカ効果のイメージ

バルディ教授は、複雑なシステムダイナミクスの計算による工業生産などの推移予測が上図のような「セネカ型」を示すことに注目し、できるだけ単純な数理モデルでどのような要因がセネカ型を帰結するのかを考究しました。「資源」が「資本・生産者」「汚染・寄生者」へと変換されるだけの単純なモデルを用いて、「汚染・寄生者」の寄与が増すことによってセネカ型になることを示しています。なお演者は、セネカ効果の誕生秘話について『Dmitry Orlov 氏の「崖の底にある藁の山」』(http://shiftm.jp/?p=146)、また、その数理的な骨子について『Ugo Bardi 氏の 「セネカ効果：衰退局面が成長局面より速いワケ」』(http://shiftm.jp/?p=253)と題してすでに報告しています。

崩壊はバグではなくシステムに内在する性質だと捉えるバルディ教授は、後期ストア派の思想、つまりローマ帝国の衰退・没落が始まる時期に苦難の中にあって平静を保つことを説いた思想に注目しています。エピクテトスの言葉“Make the best use of what is in your power, and take the rest as it naturally happens”を衰退局面における生活信条として推奨し、終章では、”man is wolf to man”という諺に対比させて、ストア派の信条とも言えるセネカの言葉”man is sacred to man”を紹介して一縷の望みを託しています。「セネカによれば、人類は、効

用関数の最大化に一意専心するばかりで樹木が枯死するまでその価値もわからないような創造物、つまり今日時折ホモ・エコノミクスとして特徴づけられる怪物とは懸け離れた存在だという。けれども、経済成長と利益最大化という口実で今日、人類があらゆるものを台無しにしていることをいかに多くの人々が黙認していることか、考えずにはいられない。それでも、このような傾向が、間違っているだけでなく、自分自身をそんな獣の仲間ではないと考える人に対する侮辱も同然だとあなたが考えるならば、よりよい世界を望むことも不可能ではない。それは一つの希望であり、変化は避けられないのだ」（演者訳）、と。

しかしながら、歴史に学ぶや、ストア派的な不退転の倫理観を保持することが困難な時代の到来を憂慮せざるを得ません。トインビー『歴史の研究』によれば、文明の解体期に為政者は「復古主義」に傾倒するきらいがあり、プラトン『国家』（第 8 巻）によれば、民主制から僭主独裁制が誕生する、このような歴史発展パターンが論じられています。また、20 世紀のファシズムについて論じたフロム『自由からの逃走』やユング『現在と未来』には、産業化・都市化に伴って、同調を強いられつつ自発性を発揮することが難しくなり、無力感や孤独感、不安や動揺を感ずるパースナリティが育まれ、没落の時代には藁にも縋るかのように全体主義のデーモンを呼び出してしまい、いきおい独裁的、権威主義的な圧政に道を開くことが記されています。

興味深いことにユングは、前掲書の中で”man is wolf to man”を「悲しいながら永遠の真理」だと言及しつつもヒトラーとナチズムが台頭した頃のことを次のように回想しています。

「第一次世界大戦の後に起こった無意識における高潮は、個人の夢のなかにも反映され、野蛮や暴力、残忍さ……要するにあらゆる闇の勢力を表わす集合的、神話的な象徴としても現れていました」、「私はこうしたたくさんのケースを追跡し、この闇の軍勢がいかに個人の試験管のなかで沸き立ち、出陣に備えているかを観察することができました。この勢力が個人の道徳と知的な自己制御の堰をぶち抜いて、その意識の世界まで浸すのが見られたのです。おそろしい苦悩や人格の崩壊もしばしばでした。しかし個人が一片の理性を固守し、あるいは人間関係の絆を保つことができたときは、意識的精神の混乱によって無意識のなかに新しい補償[*1] の動きが起り、しかもこの補償は意識のなかに統合されたのです。新しい、集合的な性格の象徴も現れましたが、しかしこのたびは秩序の力を反映したものだったのです。これらの象徴には、規矩や比率や左右対称的な配置が、独特の数学的、幾何学的構造をもって表われていました。それらは一種の車輪の軸のような形を表しており、マンダラとして知られています。いかにこれが不可解なものに思われようと、一言述べておかねばならないのは、これが希望の光を表しているからであります。この崩壊と混沌たる無秩序の時代にあっては、希望こそなににもまして必要なのは言うまでもありません。」（波線は演者加筆。「影との戦い」、松代洋一編訳『現在と未来 ユングの文明論』平凡社ライブラリーに所収）

破局によって破壊的衝動と秩序への渇望が沸き起こることを精神科医で心理学者のユングは観察していたわけですが、これはトインビーが解体期の社会に属する人々にはさまざまな形で「魂の分裂」[*2]（放縦と自制、脱落と殉教、漂流意識と罪悪意識、混淆意識と統一意識のような受動的反応と能動的反応）が見いだされると指摘していたことと一致します。

[*1] 「意識における何らかの不足が無意識の過程によって適切に補われること」

[*2] 反応が暴力的か非暴力的かにより、受動的な「復古主義」と「超脱」、能動的な「未来主義」と「変貌」の 4 通りの生活態度となる。

ところで、「規矩や比率や左右対称的な配置」に則った「独特の数学的、幾何学的構造」を私たちは本来備えており、秩序ないし調和を意識のなかに統合する上で打って付けの作図問題が 2050 年ほど前にパクス・ロマーナを樹立したローマ帝国初代皇帝アウグストゥスに献上されていました。

> 「自然は人間の身体を次のように構成した：頭部顔面は顎から額の上毛髪の生え際まで 1/10、同じく掌も手首から中指の先端まで同量；頭は顎から一ばん上の頂まで 1/8、首の付け根を含む胸の一ばん上から頭髪の生え際まで 1/6、＜胸の中央から＞一ばん上の頭頂まで 1/4。顔そのものの高さの 1/3 が顎の下から鼻孔の下までとなり、鼻も鼻孔の下から両眉の中央の限界線まで同量。この限界線から頭髪の生え際まで額も同じく 1/3。足は、実に、背丈の 1/6；腕は 1/4；胸も同じく 1/4。・・・人体の中心は自然に臍である。なぜなら、もし人が手と足を広げて仰向けにねかされ、コムパスの先端がその臍に置かれるならば、円周線を描くことによって両方の手と足の指がその線に接するから。さらに、人体の図形がつくられるのと同様に、四角い図形もそれに見出されるであろう。すなわち、もし足の底から頭の頂まで測り、その計測が広げた両手に移されたらならば、定規をあてて正方形になっている地面と同様に、同じ幅と高さがそこに見いだされるであろう。
>
> それ故、このように自然が人間の身体を、肢体がその総計である全体の姿に比例的に照応するよう、構成したとすれば、昔の人たちは、建物を造り上げるにあたって一つ一つの肢体が全体の外観に対して通約的正確さを保つよう、十分な根拠をもって定めたのだと思われる。」
>
> （森田慶一訳『ウィトルーウィウス建築書』東海大学出版会）

ウィトルウィウスはアウグストゥスの磐石な治世を願って『建築十書』を献上し、その第三書にて、カネ（接待）・コネ（出自）でうまく世渡りしている名ばかりの人に憤慨を露わにした上で、神殿の建築を託するに相応しい人物を探し出すために、この作図問題を出題しました。この作図問題をレオナルド・ダ・ヴィンチは見事に解き、「ウィトルウィウス的人体図」と呼ばれる有名な絵を残していますが、レオナルドがどのようにしてこの問題を解いたかは知られていません。

この作図問題を自ら解いてみるならば、数学的には現代の中学レベルながらも、その巧妙さに驚かされます。それは、部分と全体の調和がとれたグランド・デザインを描くには、指導原理を見いだして演繹的に整合性を図るべく獣を退治して足元を固めることが重要であることを教えてくれます。そして、ユングの言葉を信じるならば、建設的な秩序の力を呼び起こす神経系の構築に一条の光となるかもしれません。

縮小社会を展望するための指導原理とは、(i)質量保存則およびエネルギー保存則ゆえに生産・輸送の規模が規定され、(ii)取引量の縮小に伴って貨幣数量説に応じた物価変動・収益予測が導かれ（貿易金融への影響、名目経済の縮小による債務不履行あるいは通貨の過剰供給によるハイパーインフレ）、それでも(iii)人々は従属栄養生物としての存続要件を満たすべく振る舞わざるを得ないということでありましょう。諸々の根本原理から予見される環境変化の挑戦に対して、願望妄想に囚われることなく、現実的に応戦すべく「変貌」を遂げた者が次の文明の牽引役になるというトインビーの歴史観を思い出して、楽しい縮小社会を展望したいものです。